

# 昭和初期の幼稚園における家庭通知の実際

## Actual Home Notification in the Kindergarten in the Early Showa Period

(2021年3月31日受理)

山本 房子

Fusako Yamamoto

Key words : 幼稚園教育, 家庭教育, 幼稚園令

### 要 旨

幼稚園での教育及び保育は、幼稚園令（1926）において「家庭教育ヲ補フ」ことが目的として挙げられて以来、家庭教育や子育て支援との関連の中でその必要性が考えられてきた。本研究は、幼稚園令以降の昭和初期における幼稚園と家庭との関係について、当時の幼稚園が「家庭教育を補フ」という目的をどのように果たそうとしたのか、園からの家庭通知（配布物）をもとに明らかにしようとしたものである。結論として、以下の2点を導き出した。①園での教育は家庭の延長であるという認識のもと、幼児の実態や家庭環境についての調査を実施したうえで、家庭との関係性を築こうとしていた。調査項目から、保護者が家庭での教育や躰を振り返ったり意識したりするものもあった。②当時の保育者も、家庭通知（配布物）を通して、幼稚園教育の目的や園の方針について家庭に情報を伝えているとともに、家庭からの意見や要望も取り入れようと模索していた。それは、幼児を家庭と共に育てていこうとする姿勢のあらわれでもあり、現代の家庭との連携の在り方につながるものでもある。

### 1. はじめに 研究の目的

日本の幼稚園教育は、1876（明治9）年11月に開設された東京女子師範学校附属幼稚園（現 お茶の水女子大学附属幼稚園）をもってその始まりとされている。その翌年1877（明治10）年に制定された附属幼稚園規則では、幼稚園の目的として以下のように記されている<sup>1</sup>。

学齡未滿ノ小兒ヲシテ天賦ノ知覺ヲ開達シ固有ノ心思ヲ啓発シ身体ノ健全ヲ滋補シ交際ノ情誼ヲ曉知シ善良ノ言行ヲ慣熟セシムルニ在リ

東京女子師範学校附属幼稚園の開園は当時大きな影響を与えたものの、幼稚園の普及が順調に進んだわけではない。1879（明治12）年の教育令で幼稚園に初めて法的

な位置付けがなされたものの、当時の幼稚園数は、東京女子師範学校附属幼稚園に公立2園、私立1園を加えたわずか4園であった<sup>2</sup>。幼稚園の普及が進まなかった理由として、当時の幼稚園は、園舎が洋風の建築物であったことや、十分すぎる広さの園庭や様々な設備が整っていたことにより、園の設立、運営に多額の費用を要すると世間に思われていたことが挙げられる。さらに、入園児の大半が富裕層の家庭の幼児が占めていたことにより、就園率も伸びなかったのである。こうした状況を受け文部省は、幼稚園が一部の地域や、富裕層の家庭だけではなく広く一般にも普及するよう、簡易な幼稚園の設立を提唱した。

1926（大正15）年に幼稚園令が制定されて、幼稚園は教育制度上確固とした地位が与えられ、量的、質的にも著しい発展が期待された。

幼稚園の目的として、幼稚園令の第1条で以下の様に記されている<sup>4</sup>。

#### 第一条

幼稚園ハ幼児ヲ保育シテ其ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス

①幼児の心身の健全なる発達を図ること、②幼児の善良な心を育てること、③家庭教育を補助することである。①、②については、先に述べた東京女子師範学校附属幼稚園でも同様のことが示されていた。では、③家庭教育を補助するとはいったいどういうことであろうか。

幼稚園令と同日に文部省訓令として出された「幼稚園令及幼稚園令施行規則制定ノ要旨並施行上ノ注意事項」には、幼稚園令の制定の理由とともに以下のように記されている<sup>5</sup>。

従来幼稚園ニ関スル事項ハ小学校令施行規則中ニ規定セラレタリ然レトモ（中略）我が国ニ於ケル社会ノ情勢ニ鑑ミテ一層其ノ施設ヲ改善スルノ必要アルヲ認ムコレ幼稚園令ノ公布ヲ見ルニ至リタル所以ナリ

児童ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養セムトスルニハ幼児ヨリ之ニ著手スルヲ以テ優レリトスコレ家庭教育ヲ裨補スヘキ幼稚園施設ノ必要アル所以ナリ殊ニ社会生活日ニ複雑ヲ加ヘ一家ノ事情意ヲ子女ノ教養ニ専ラニスルコト能ハサルモノ漸ク多カラムトスル今日ニ在リテハ幼稚園ノ任務ハ益々重要ノ度ヲ加ヘサルヲ得ス

（中略）父母共ニ労働ニ従事シ子女ニ対シテ家庭教育ヲ行フコト困難ナル者ノ多数居住セル地域ニ在リテハ幼稚園ノ必要殊ニ痛切ナルモノアリ今後幼稚園ハ此ノ如キ方面ニ普及発達セムコト期セサルヘカラス

幼稚園令で示された幼稚園の目的①、②を達成するためには、家庭教育が重要だと述べている。この点において当時の資料では、幼稚園は幼児の心身の発達を促す場というよりもむしろ、「家庭教育の不十分さを補ふ爲の

社会的必要の施設といふ方面から幼稚園を見るのが、顕著となって来た」と述べている<sup>6</sup>。幼稚園は、幼児の教育のみならず、家庭への教育も強く求められたのである。

このことは、戦後の1948（昭和22）年に作成された「保育要領」においても引き継がれている。保育要領は、今日の幼稚園教育要領の始まりとされているが、幼稚園教育要領と大きく異なる点がある。幼稚園教育要領が幼稚園教諭を対象に出されたものであるのに対し、保育要領は「教師や保育」だけでなく、「同時に母親たちにもその育児について貴重な参考となる」手引きとして発行されたものである。保育要領の「七 家庭と幼稚園」には、幼稚園と家庭とが連絡を密にすることや園による保護者の教育に加えて、保護者の子育ての指針の方向性や配慮事項も挙げられている。

では、幼稚園令から保育要領までの時代、昭和初期において、幼稚園が、幼児を教育する場としてだけでなく、家庭教育を補う場としてその役割をどのように果たそうとしていたのか、つまり当時の幼稚園と家庭とがどのような関係性のもとで、園はどのようなアプローチを行っていたのであろうか。

先行研究をみると、明治期から昭和にかけての小学校と家庭との連絡についての研究はいくつかある。（有本・2013）（山梨・2014）幼稚園を対象とした研究として、園児が毎日携行する「書き物」の通時的変遷に焦点を当てた研究（高ら・2012）や昭和39年版幼稚園教育要領時代の学級通信を分析して園と家庭とのかかわりを検討した研究（奥山・2011）がある。しかし、幼稚園令以降昭和初期における幼稚園が家庭とどのように連絡をとっていたのかについての研究報告は充分ではないと言えよう。

本研究は、当時の資料を分析することにより、幼稚園令制定後の昭和初期における幼稚園と家庭との関係性及び、園と家庭とがどのような連絡を行い、また、幼稚園が家庭にどのような情報を伝えようとしていたのかその実際を見ていく。

## 2. 研究の方法

昭和初期の幼稚園と家庭との連絡の実際を、当時の資料をもとに明らかにする。分析する資料は、当時出版さ

れた「幼児の教育」をはじめとした園と家庭との連絡について具体的な記述がある資料6点である。その資料をもとに、各園での家庭との連絡方法や連絡の内容を分類し検討する。

### 3. 幼稚園と家庭との連絡方法

資料に記載されていた各幼稚園における家庭との連絡方法を分類し表にまとめたものが表1である。

「園名」は資料に記載のままを抜粋した。「調査書」と「配布物」の欄については、資料に記載されていた具体的な名称や内容を抜粋した。「保護者会」、「参観 懇談」、「家庭訪問」、「通信簿」については、実施している旨が記載されている園には○を記入した。「そのほか」の欄には分類できなかった連絡方法を記載した。

なお、「通信簿」とは、資料によると出欠の連絡を中心とした現在の出席帳（シール帳）のことである。

#### (1) 調査書

半数以上の園で、幼児や家庭、家族についての調査が実施されていた。今回分析した園のうち12園で、実際の調査項目や調査用紙が記載されていた。調査項目を見ると、幼児に関する主な調査項目として、幼児の名前や生年月日、健康状態、性格、食べ物等の好き嫌い、遊び、友達関係といったものがあつた。家庭環境や家族に関する主な調査項目として、家族の性別、職業、年齢、人数があつた。当時の時代背景や幼児の家庭環境が反映されたものもあり、宗派や雇人、付添人の有無や、実親かどうかといった項目もあつた。

ここでは、徳島県女子師範学校附属幼稚園（現 鳴門教育大学附属幼稚園）、武蔵野高女附属幼稚園（現 武蔵野短期大学附属幼稚園）、福島県郡山幼稚園の実際の調査項目を見てみる。

徳島県女子師範学校附属幼稚園においては、幼稚園の生活は「取りも直さず家庭よりの延長に過ぎない」ため、保育者は「幼児そのものの家庭に於ける生活状況、幼児の教育方針、その他環境上の詳細なる報告」が必要として、入園と共に「幼児個性及び家庭調査」配布し実施していた。

その項目は、家族の状況、職業・副業、環境、幼稚園

と家庭との距離・時間・略図、宗教、幼児の体質及び性質、子どもの家庭内の生活状態、睡眠、便、躰け方、その他、幼稚園に対する希望であるが、項目ごとにさらに詳細な質問が挙げられている。例えば、幼児の体質や性質についての項目「御子様の體質及び性質」では、幼児の「よいと思はれる點」「悪いと思はれる點」に加えて「特に他の子供と異つた點」を尋ねている。また、「躰け方」の項目では、家庭の教育方針や家での手伝いのことに加えて、「何を最も怖がられ、又何を愛するか」「職業が子供の躰けの上に如何なる影響があるのか」といった、親自身の考えやこれまでの子育てや教育を振り返って回答しなければならないような質問もある。

武蔵野高女附属幼稚園においては、「眞に保育の効果を収めんとせば、先づ其の幼児の性質體質並に家庭の事情を知る事が必要である」としている。本来であれば家庭訪問で幼児のことについて話し合いをしたり家庭の希望を聞いたりすることによって「各個性に適應した」保育方針をたてていたようであるが、幼児の数が多くなったことで、調査用紙を配布し整理することもやむを得ないとして「幼児調査」が実施されていた。

調査項目は、幼児の氏名、生年月日、家長の職業、実父母の氏名年齢、祖父母の有無、兄弟の数、生後の重なる疾病、幼児の長所・短所・習癖、最も好む遊び、最も好む飲食物・嫌いな飲食物、幼稚園に対する希望である。調査項目は他園とそれほど変わらないが、武蔵野高女附属幼稚園では「幼児調査」結果をもとに『家庭通信箋』（表2）を用いて週単位で家庭と連絡を図っている。

表2 武蔵野高女附属幼稚園 家庭通信箋（一部）

| 備考 | 第一週    | 第一週    | 第一週    | 第一週    | 週      | 昭和<br>年度 |                 |
|----|--------|--------|--------|--------|--------|----------|-----------------|
|    | 至<br>日 | 自<br>日 | 至<br>日 | 自<br>日 | 至<br>日 |          | 自<br>日          |
|    |        |        |        |        |        |          | 事項              |
|    |        |        |        |        |        |          | 善行              |
|    |        |        |        |        |        |          | 健康状態            |
|    |        |        |        |        |        |          | 精神<br>向の        |
|    |        |        |        |        |        |          | 折友<br>達との<br>合の |
|    |        |        |        |        |        |          | 主任<br>印         |
|    |        |        |        |        |        | 保護者<br>印 |                 |

福島県郡山幼稚園では、入園前（入園願書を家庭から請求された時）に、「幼児日常の聴き取り書」を保護者に渡し調査している。家庭での幼児の様子を知った上で適切な園生活を提供したいという目的で実施されている。その項目は次の12項目である。

- 1 食事は日に三度正しく食べますか。
- 2 挨拶は、來客の時或は長上に對しよくいたしますか。
- 3 幼稚園に來ることをのぞんで居ますか。
- 4 見た事聞いた事をよく話しますか。
- 5 金銭はつかひますか毎日いくら位與へますか。
- 6 自分の品物をよく始末しますか。
- 7 遊びは内外どちらの遊びを好みますか。  
友達を集めて來ますか。
- 8 玩具はどんな物を好みますか。
- 9 お菓子と果實はどちらが好きですか。
- 10 お宅のお宗旨は何ですか。
- 11 夜は誰とねますか一人ですか。
- 12 幼稚園への御希望をきかせて下さい。

それぞれの項目を見ると、特に難しいことを尋ねているわけではない。しかし、ここでも先述の徳島県女子師範学校附属幼稚園の調査項目と同様に、幼児がこれらの項目についてできているかどうかではなく、保護者自身の子育てや教育方針、項目内容について家庭教育においてどのくらい大切にしてきたかどうかを問われているような項目もある。同時に、幼稚園では、これらの項目内容にそって、その視点を大切にしながら教育が行われるということを暗に示しているとも考えられる。これは、幼稚園が幼児の教育のみならず、保護者への教育を行っていることの表れとも言えよう。

## （2）配布物

表1に記載されているものは、園が家庭との連絡において重要視している配布物である。（通常、園ではこれ以上に多くの配布物例えば行事の案内やお知らせ等が出されている。）ここでは、家庭と幼稚園とが理解し合うための目的で出されている配布物について見ていく。

入園に伴う連絡事項の配布物を挙げていた園は3園（東京京橋区朝海幼稚園、東京府女子附属幼稚園、福島市福島幼稚園）で、詳細な内容も記されていた。

東京府女子附属幼稚園では、入園前に新入園児の保護者との打ち合わせを行い、そこで要項を配布している。要項の内容は、「当園の性質、保育方針、保護者として心得居られたき事、幼児の携帯品、服装の事、遊具其他保育上必要品の事、登園下園の時間、缺席届の事、傳染性の病氣の時の心得、附添心得、附添人を付ける時の心得等」である。

東京京橋区朝海幼稚園（現 東京都中央区立朝海幼稚園）では、「入園につき」とした印刷物を渡している。その内容は15項目であるが、服装や持物のこと、付き添いのことといった園からの指示や連絡だけでなく、「幼児の事に就きましては電話にて差支へありませんからドシドシと御相談ください」「御父兄は度々幼稚園へおいで下さいまして幼児の遊んでいる所を御覧下さい」「何事も御遠慮なく御相談をお願いいたします」といった、家庭からの意見を求める項目も含まれている。

福島市福島幼稚園でも、「幼児の入園に就て保護者への一言」として、幼児の持物や病気について、付添人の対応等が示されている。最後には「幼稚園に就て御不審

の點は何にても御遠慮なく御相談ありたし」と記されている。

横濱小学校附属幼稚園では、「幼稚園に於ける仕事や希望につきての知らせ」を行い、「家庭との歩調をとる」としている。また、愛媛県今治市昭安幼稚園では、「毎月始に生活予定表と家庭に送り行事及び生活の一部を知らず」としている。徳島県女子師範学校附属幼稚園では「幼稚園の保育に関する事項、幼稚園よりの希望注意、其他幼児研究に関する問題、或は保護者よりの通信記事等」を小雑誌として発行することを勧めている。

幼稚園と家庭との連絡方法としてこうした小雑誌（小冊子）が当時の園で発行されていたという記録が残されている。岡山県女子師範学校附属幼稚園（現 岡山大学附属幼稚園）では、小冊子『ポプラ』が、倉敷幼稚園（現 倉敷市立倉敷幼稚園）では小冊子『双葉』が発行されている。「ポプラ」には、保護者の寄稿や全園児の発育表、保育予定、幼児の自由画等が記載されている。『双葉』も、幼児の園での生活や保護者からの投稿、幼児にきかせたいお話等が掲載されている。

#### 4. 配布物（家庭通知）の実際

ここでは、茶屋町幼稚園（現 倉敷市立茶屋町西幼稚園）に現存する園から配布された家庭通知の綴り、図1「自昭和6年度 茶屋町幼稚園 家庭通知控」（以下「家庭通知控」）をもとにその内容等を見ていく。この「家庭通知控」には昭和6年9月の開園から昭和11年度までの

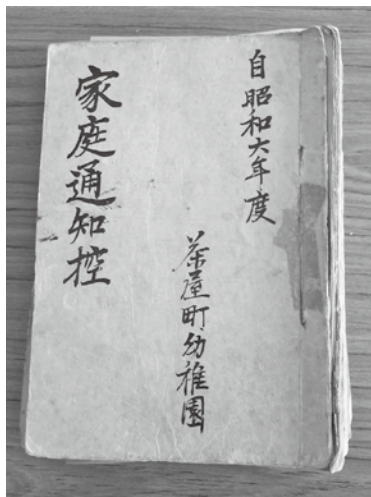


図1 家庭通知控（表紙）

家庭通知が綴じられているが、本研究では開園年度（昭和6年9月から昭和7年3月）に配布された通知25通を分析する。それらの概要（日付、主な内容）を整理したものが表3である。

表3 茶屋町幼稚園 昭和6年度家庭通知

|   | 日付        | 主な内容   |
|---|-----------|--|
| ① | なし        | 開園の挨拶、幼稚園とはどんなことをする所か「園児に対する御注意やら希望」（23項目）                           |
| ② | 昭和6年9月19日 | 布片のお礼、弁当開始日・持物、質素な冬服   |
| ③ | 10月2日     | 第1回弁当の様子・木の箸箱、便所でのズボンの着脱、土曜日（弁当不要・終了時刻）                              |
| ④ | 10月6日     | 7日保育料、質素な服装・おかず、来園・参観時の注意事項  |
| ⑤ | 10月1日     | 次週の予定（午前保育、休園、行事等）   |
| ⑥ | 10月21日    | 所感（子どもの様子、幼稚園の目的）、参観（10月22・23日）の案内と一日の流れ                             |
| ⑦ | （参観当日）    | 参観のお礼、参観しての感想のお願い  |
| ⑧ | 10月31日    | 登園時刻、前掛の記名、鼻汁をとるおけいこ、食物・玩具を持ってこない・玩具のやり取りを止める、病気の静養、夜は早くねる           |
| ⑨ | 11月6日     | 7日保育料  |
| ⑩ | 11月17日    | 歯を磨く習慣、男女共さるまた着用、菊の花のお礼、小鳥のなっば、園に対する不足                               |
| ⑪ | 12月5日     | エプロン等持物への記名、制帽の準備、汚れてもよい洋服や着物、オーバーはなるべく着せない、通知簿出欠の確認、7日保育料、園への参観のお願い |
| ⑫ | 12月9日     | 11日休園の連絡   |
| ⑬ | 12月24日    | 12月27日から休み、1月1日祝賀式、8日始園式、遊戯会について                                     |
| ⑭ | 昭和7年1月1日  | 御相談（園のやりかたについて批評のお願い、来年度からの服装）、9日保育料、遊戯会延期                           |
| ⑮ | 1月14日     | 幼稚園の設備（ストーブ、大火鉢、湿度）  |
| ⑯ | 1月14日     | 7年度入園案内（来年度入園予定者）別紙（入園願用紙）、保育料月1円                                    |
| ⑰ | 2月2日      | 風邪の流行、卒園記念写真撮影日、3月6日遊戯会、保育料8日、参観のお願いと注意事項                            |
| ⑱ | 2月8日      | 2月11日写真撮影、写真の購入希望、代金25銭  |
| ⑲ | 2月10日     | 2月11日紀元節祝賀式、卒園写真撮影   |
| ⑳ | 3月1日      | 遊戯会案内（来賓）  |
| ㉑ | 2月29日     | 子どもの様子、3月7日遊戯会案内   |
| ㉒ | なし        | 遊戯会プログラム   |
| ㉓ | 3月        | 幼稚園は如何なる処か<br>保育要目（茶屋町幼稚園）   |
| ㉔ | 3月24日     | 3月23日卒園式案内（来賓）   |
| ㉕ | （式当日）     | 卒園児名簿  |

### (1) 茶屋町幼稚園について

茶屋町幼稚園は、昭和6年（6月27日認可）木綿織商（当時は小倉織と呼ばれていた）大隅屋、佐藤栄八の夫人、佐藤太亀によって設立された。8年後の昭和14年に茶屋町へ寄付され茶屋町立茶屋町幼稚園（西園舎）となった。（町では茶屋町小学校内に保育舎を設け、これを東園舎とした。）その後昭和47年茶屋町が倉敷市へ合併すると同時に、倉敷市立茶屋町幼稚園となった。昭和60年には、東西園舎がそれぞれ分離し、倉敷市立茶屋町東幼稚園と倉敷市立茶屋町西幼稚園となった。茶屋町幼稚園の園長は昭和45年度まで小学校長が兼務していた。

### (2) 作成者

本資料に綴られているものは全て縦書き、手書きで作成されている。25通のうち8通には保母主任 中西静湖(①⑥⑭)と園長 眞野亮平(⑬⑱⑳㉑㉒)の名が記されている。先述の通り当時の園長 眞野亮平は茶屋町小学校校長との兼務であった。無記名の17通については、筆跡からその多くは上記のどちらかが作成したものと推測される。

### (3) 内容

茶屋町幼稚園では月に数回通知が出されている。内容は、保育料納入日(④⑨⑪⑭⑰)や保育時間の変更・休園等の連絡(②⑤⑥⑫⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑)といった事務連絡、園児の持物や生活習慣に関する家庭への要望(①②③④⑧⑩⑪⑰)、保育中の園児の姿や園の施設について(⑥⑬⑲)、幼稚園の目的や保育内容についての園長・保母の思い(①「所感」⑥㉓)や提案(「御相談」⑭)である。

多くの通知が、短文で用紙1枚程度に収められているが、長文で複数枚のものもある。①は2枚、⑥は3枚、㉓は8枚である。ここでは、保母の強い思いが記されている①と⑥を中心にその一部を抜粋しながら以下に示す。

#### ①開園の挨拶・「園児に対しての御注意やら希望」

主任保母、中西静湖の記名がある。開園の挨拶やお礼に続き次のことが記されている。

幼稚園はどんなことをする所か（中略）学校とはすっかりやり方が変わってゐます。園児が来りましたらその時から保育はもう始まってゐます（中略）子供の仕事は總べて遊びで御座います。その遊戯をとほしての保育が我々の任務となってゐます文部省主催の講習會に来りましたときも（中略）此後は大いに家庭教育に目覚めてもらいたいと力説されました。しかし現代のような忙しい社会ではそれをわかりつつも両親は家庭教育を立派に施す事が出来ません。その点から考えましても、その教育を幼稚園におまかせ下さったことは何と申しましょうか私共もうれしいやら、なんだか重い責任を感じまして立派な成績を上げていきたいと存じます。

開園の挨拶としての通知であるが、幼稚園での教育が遊戯中心であること、小学校との違い、そして、家庭教育を補助する場としての幼稚園の役割が、意気込みとともに伝えられている。

#### ⑥御案内及び所感

主任保母、中西静湖の記名がある。開園の挨拶やお礼に続き次のことが記されている。

開園して2か月間の幼児の様子や保母の対応、幼稚園の目的、小学校への参観を強く勧めている。

お子様も大変遊びがうまくなられまして、却って私達が教えを受けています。まあ、一度おいで下さって百二十人の園児が如何に一日中活動しているか、いかに熱心に遊びにふけているか見て下さい。御自分のお子さんもよく見て下さい。他人のお子様と比べても見て下さい。

幼稚園は小学校へ入学したとき少しでも都合がよいから設けられているのではなくて全く別な目的をもっています。主として家庭教育の補助と思って下さればよろしい（中略）なぜ園へ来させるのか。私はこの辺の目のつけ所をあきらかにして見たいと思ひます。（中略）

いかなる立派なお宅でも同じ年頃の子供さん百二十人も。よしや十人でも集めて、人間的社交交渉の訓練をなさるお宅はありまうまい。（中略）

同じ年頃の子供と遊ばせましょう。(中略)はかり  
 知ることの出来ない社会的訓練を今此の幼時の時か  
 ら正しく植えつけようではありませんか。  
 正しい心の持主 正しい心で丈夫な子供・・・なん  
 とうれい安心ではありませんか。保姆の役はそこ  
 に主力を入れています。画をかいたり、豆細工をす  
 るのは一つの方便ですこの成績が他人よりまけたか  
 らとて力を落して下さいませ(中略)丈夫で正し  
 い心を持つ子供に育てようではありませんかお母様  
 !!ついては一度保育の実際を見ていただきたく御座  
 いますので。明日明後日(二十二,二十三日)の二  
 日間をこれにあてましたから。いつでも都合のよい  
 時に来て下さい。

ここでも、幼稚園の目的としての「家庭教育の補助」  
 について記されているが、それは、幼稚園が家庭教育の  
 足りない所を補うというよりも、幼稚園という集団の場  
 であるからこそできる役割を挙げ、園と家庭とがともに  
 子どもを育てていこうとする姿勢が表れている。園と家  
 庭とが協力するために、まずは、園での保育の実際を保  
 護者に見てもらえるよう参観日を設けて、その参加を呼  
 び掛けている。

この資料以外にも、以下のように、折に触れて参観を  
 勧め家庭からの連絡を求めている。

⑩「どうかどんな小さい事でもよろしう御座いますか  
 ら、園の方へお知らせください」⑪「お暇がありました  
 ら御参観下さる事をお願いいたします」⑫「何かやりか  
 たについて御批評下さいませと申しましても皆様御遠慮  
 なさって何もおっしゃって下さいませ。子どもを育て  
 ることについて何でもよろしい(中略)機関雑誌の生れ  
 るまでどっさり申して下さいませ」

茶屋町幼稚園では、幼稚園のその目的や意義、小学校  
 教育との違いを家庭に伝えると同時に、家庭からの要望  
 等も取り入れながら幼稚園での教育を理解してもらおう  
 と模索していたと言えよう。当時の幼稚園が家庭との対  
 話、園と家庭との双方向のかかわりを開園当初から求め  
 ていたことが明らかとなった。

## 5. おわりに

幼稚園令制定からの昭和初期の幼稚園と家庭との連絡  
 方法及び家庭に伝えようとした情報について論じてき  
 た。まとめとして次の2点を挙げる。

昭和初期において幼稚園と家庭とは様々な連絡方法を  
 とっていたが、多くの園では調査書を用いて家庭での幼  
 児の様子や生活の実態を把握しようとしていた。調査内  
 容を見ると、幼児の様子を回答していくなかで、保護者  
 自身がこれまでの子どものかかわりや躰について振り  
 返ったり、意識したりするものもあった。家庭との連携  
 の中で、保護者の気付きを引き出すことの重要性を示唆  
 していると言えよう。

次に、園からの配布物や茶屋町幼稚園の家庭通知の内  
 容から、幼稚園は一方的に情報を伝えるだけでなく、家  
 庭からの意見や要望、相談等も受け付ける姿勢が見られ  
 た。

当時の幼稚園は、文部省から家庭教育の低下により、  
 「家庭教育ヲ補フ」として、いわゆる保護者への教育も  
 強く求められていた。その実際の取り組みを見ると、幼  
 稚園は家庭に対して決して上からの視点で、保護者を変  
 えよう、家庭教育を変えようとしていたのではなく、保  
 護者と同じ視点に立ちながら幼稚園での教育を理解し  
 てもらおう、共に幼児を育てていこうとしていたことが、  
 当時の資料から読み取れた。

岡田の言うように「幼稚園は園での保育とともに、家  
 庭が心身ともに健やかに成長発達する」場となること  
 願って連携していくことが求められている<sup>7</sup>。一方で、  
 大豆生田の言うように「保育のサービス化が進み、保護  
 者にとって便利なだけの園が求められる傾向にある」た  
 め、「子どもを真ん中に置きながら保育の場と家庭が密  
 接につながりながら子どもを共同的に育てていくよう  
 な関係性」も求められている<sup>8</sup>。

当時の幼稚園が家庭とどのように連絡をとろうとして  
 いたのかその実践であり模索は、就業形態が多様化し、  
 保育時間の長時間化している現在の保育所、こども園、  
 幼稚園という場での家庭との連携の在り方を考えていく  
 上でも一つの糸口となるだろう。

表1 昭和初期の幼稚園と家庭との連絡方法

| 資料<br>発行年      | 園名                   | 調査書                                     | 配布物   | 保護<br>者会 | 参観<br>懇談 | 家庭<br>訪問 | 通信簿 | その他       |
|----------------|----------------------|---|---|----------|----------|----------|-----|-----------|
| 1927<br>(昭和2)  | 芦池幼稚園                |   | 園外保育通信表   | ○        | ○        |          |     | 電話        |
| 1929<br>(昭和4)  | 岡山市市立幼稚園<br>深抵幼稚園    | 入園前幼児状況調査                               |   | ○        | ○        | ○        | ○   | 児童相談      |
| 1930<br>(昭和5)  | 武蔵野高女<br>附属幼稚園       | 幼児調査                                    |   |          |          | ○        |     | 家庭<br>通信箋 |
|                | 東京京橋区<br>朝海幼稚園       | 幼児の家庭状況しらべ                              | 入園につき<br>躰方について   |          |          |          | ○   |           |
|                | 大阪市立<br>御津幼稚園        | 家庭の状況及幼児保護者に<br>ついての調                   |   | ○        |          |          |     |           |
|                | 東京市富士見<br>尋常小学校附属幼稚園 | 幼児調査票<br>家庭の年中行事及<br>幼児の自由遊びの種類         |   | ○        |          |          |     |           |
|                | 東京府女子<br>附属幼稚園       | 幼児調査用紙                                  | 要項  |          |          |          |     |           |
|                | 福島県<br>郡山幼稚園         | 幼児日常の聴き取り書                              |   |          |          |          |     |           |
|                | 横濱小学校<br>附属幼稚園       | 幼児及家庭の状況調査<br>入園後の幼児の状況調査<br>休暇中の生活状況調査 | 幼稚園に於ける仕事や<br>希望につきての知らせ<br>保護者會発行の雑誌                             | ○        |          |          |     |           |
|                | 福島市<br>福島幼稚園         | 幼児情況調                                   | 幼児の入園に就て保護者へ<br>の一言<br>幼児教育に関する一般知識<br>幼稚園にて気付きし事柄<br>園児の歌ひつつある唱歌 | ○        |          | ○        |     | 付添人教育     |
|                | 石川縣女子師範學校<br>附属幼稚園   | 環境調査<br>幼児の食量、作法等の調査                    |   | ○        | ○        | ○        | ○   |           |
|                | 愛知縣<br>岡崎市立幼稚園       | 幼児の環境調査                                 |   | ○        | ○        | ○        |     |           |
|                | 愛媛縣今治市<br>昭安幼稚園      | 幼児通園路ト觀察事項                              | 生活豫定表<br>歌詞御話手技（家庭回覽）   | ○        | ○        |          |     |           |
|                | 神戸<br>慈光幼稚園内         |   |   |          | ○        |          |     |           |
| 1931<br>(昭和6)  | 奈良女子高等師範學校<br>附属幼稚園  |   | 任意の書状やカードを用い<br>て通信   | ○        | ○        | ○        | ○   |           |
| 1933<br>(昭和8)  | 徳島縣女子師範學校<br>附属幼稚園   | 幼児個性調査<br>幼児家庭調査                        | 雑誌發行  | ○        | ○        | ○        |     |           |
| 1943<br>(昭和18) | 山形縣師範學校<br>附属幼稚園     | 家庭状況調査書                                 |   | ○        | ○        | ○        |     |           |

(筆者作成)



## 6. 引用・参考文献

- <sup>1</sup>文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに (1979) p37
- <sup>2</sup>文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに (1979) p25
- <sup>3</sup>文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに (1979)  
pp215-216
- <sup>4</sup>文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに (1979)  
pp215-216
- <sup>5</sup>文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに (1979)  
p515
- <sup>6</sup>乙竹岩作「日本女子新教育学教授用参考書」培風館  
(1937) p244
- <sup>7</sup>岡田正章『園と家庭との連携をよくするために』「幼  
児の教育」99 (3) 日本幼稚園協会 (2000) pp6-9
- <sup>8</sup>大豆生田啓友『保育の場における子育て支援の課題』  
「保育学研究」第51巻第1号 (2013) pp134-142
- 有本真紀『日本近代における〈家庭の学校化〉(I) 家  
庭の管理装置としての学校教育：明治期・大正期に  
おける「学校と家庭との連絡」』「立教大学教育学  
科研究年報」57 (2013) pp5-26
- 山梨あや『1930～40年代にかけての「学校と家庭の連絡」  
ー上郷尋常高等小学校の「懇話会記録」および「家  
庭訪問記録」を手がかりにー』「社会教育学研究」  
50巻1号 (2014) pp41-50
- 高向山, 安部千鶴, 生駒美奈, 恩田彩未『幼稚園と家庭  
を結ぶ「書き物」ー大正, 昭和, 平成からの一考察  
ー』「健康プロデュース雑誌」第6巻第1号 (2012)  
pp67-72
- 奥山順子『学級通信からみる昭和39年版幼稚園教育要領  
時代の保育の実際ー幼稚園と家庭とのかかわりを視  
点としてー』「秋田大学教育文化学部教育実践研究  
紀要」第33号 (2011) pp91-102
- 岡上増美編「蘆池聯合沿革誌」(1927)
- 『岡山訪問記』「幼児の教育」29-4号 (1929) pp37-44
- 『幼稚園と家庭との連絡の実際』「幼児教育」30-5号(1930)  
pp23-39
- 森川正雄「幼稚園の経営」東洋図書 (1931)
- 永沢義憲「幼稚園教育の実際」厚生閣書店 (1933)

